

1 開会

2 所長あいさつ

今年はよい1年でありますようにと思って年越しを迎えたが、1月1日に能登半島地震が、1月2日に羽田空港での衝突事故が起きた。このことから分かるように、いつ何時どんなことが起きるのか分からない状況にある。

今どんなものが必要なのかを感じ取る必要がある。例えば、今の時期なら寒さに対する備えやトイレなどが考えられると思う。そういった視点から、今後もより充実した防災講座を実施する必要があると思っている。

当センターも開館から40年を超えており、外壁の破損や雨漏り、ボイラーの故障等あちこちに不具合が生じている。しかし、施設利用に制限をかけないよう運営していきたいと考えている。

本日は、当センターのあり方等について助言・意見をいただき、当センターの活動の活性化につなげていきたい。

3 出席者紹介及び資料確認

4 委員長・副委員長あいさつ

委員長

前回の運営委員会から半年が経過し、その間に、社会教育主事講習も無事終了した。生涯学習センターの発展に貢献できればと考えている。

副委員長

1月の地震で、人間の無力さを痛感した。人は希望がなければ生きていけないと強く感じている。その希望とは、大それたものではなく日常の小さな希望であってもよいと考える。所属している協議会の活動を通じて、そういった希望を見つけていきたい。

5 案件 生涯学習センターの機能及び事業等のあり方について

(1) 今年度事業の実施状況

①総務班

利用人数について、過去に最も利用者が多かったのは令和元年度の138,476人だった。新型コロナウイルス感染症が5類に移行した後、利用人数は回復傾向を見せている。今年度の利用者数はおそらく7万人程度と見込まれる。

各部屋の収容人数については、新型コロナウイルス感染症が拡大していた時の定員を変更し、現在は机1台につき椅子2脚+定員上限の範囲内で椅子を追加で使用してもらっている。

外壁補修については、現在、秋田地域振興局建設部の発注で行っている。今後ど

うなっていくかについては、「社会教育施設のあり方検討」の流れによっても変わってくることになる。

和室の空調設備不良も発生したため、外気温が高い時期には、安全確保のため一時和室の利用を中止した。空調設備自体は20年以上前の機材であるため修理できず、来年度以降、家庭用クーラーを設置して対応する予定である。

②学習事業班

○今年度の特徴的な取組について

【センターの取組の概要】

取組の目的：持続可能な地域づくりの実現

取組の柱：①防災 ②障害者の生涯学習 ③持続可能な地域づくり

取組の方法：調査・研修・講座の循環型モデル

【具体的な取組】

①学校・家庭・地域の連携・協働に関するオーダーメイド型社会教育主事派遣事業

・対象：4自治体と1特別支援学校

・内容：「熟議」のファシリテートの依頼が多い。

②障害者の生涯学習支援に関するオーダーメイド型社会教育主事派遣事業

・対象：3自治体

・内容：防災講座実施、車椅子街歩き体験 等

③障害者の生涯学習支援についての個別の申込による取組

・車椅子街歩き体験（県内外の2自治体）

・あきたWith杯ボッチャ交流大会

・ボッチャ体験会

・県立支援学校卒業生を対象とした学習機会の支援

・県立高等学校の「総合的な探究の時間」に対する支援

【「熟議」について】

①行政職員向け 「熟議」ファシリテーター養成研修の実施

・ある特別支援学校では、「熟議」の意見交流を通して、企業が学校に対して、積極的な交流の機会について提案をするということにつながった。

・行政職員向け研修として実施したある自治体での「熟議」をきっかけとして、自治体内の小学校・中学校での「熟議」の開催に発展した。

②県民向け 「熟議」ファシリテーター養成講座を実施

・あきたスマートカレッジでの講座開催

・ある自治組織から支援の依頼があり、その地区の未来を話し合う場として「熟議」を3回実施

【「防災」コンテンツの強さについて】

・「防災×熟議」「防災×障害者の生涯学習」「防災×地域づくり」はいずれも幅広い展開が可能であり、今後益々需要が高まることが見込まれる。

○各担当から

- ・ 障害者の生涯学習に関する調査研究について
- ・ 市町村等関係職員専門研修等、研究大会について
- ・ 家庭教育支援指導者等研修について
- ・ オーダーメイド型社会教育主事派遣について
- ・ あきたスマートカレッジについて
- ・ 団体支援について
- ・ 展示スペース活用について

(2) 来年度の主な事業計画

- ・ 基本的には今年度と同じ方向で進めていく。
- ・ 防災・持続可能な地域づくり・障害者の生涯学習をベースに、依頼があった場合は、柔軟に対応していきたい。

(3) その他（質疑応答、感想）

- ・ A委員：自治組織からの依頼で、その地区の未来について話し合う場を支援したケースについて、2回目・3回目は当初予定していなかったとのことだが、いずれの回もファシリテーターはセンター職員が務めたのか。
→センター職員が担当した。
- ・ A委員：「熟議」を繰り返す中で、自分たちで「熟議」を行おうという雰囲気になったか。
→初めは、「熟議」を一度見せてほしいという依頼だったため、話合いの場にセンター職員が出向き「熟議」を行った。「熟議」体験後、経験のない人が自分たちだけで「熟議」を行うことは難しいということを感じたようで、こちらが「よければ、次に話合いを開く時も呼んでください」と伝えたところ、すぐに2回目の依頼が来た。合計3回の「熟議」を経て、自分たちの地区のこれからについて、会議のメンバーが一定の方向性を共有し、現在は自立的な運営に向けてゆるやかに動き始めているようだ。
- ・ A委員：私も、「熟議」形式の話合いの良さは理解しているので、様々な講座や研修を受け、センターの職員の皆さんから後押ししてもらいながら、自立して「熟議」を進めていけるようになりたいと考えている。
→この自治組織の例のように、当センターでは、希望があればできる限りサポートしていきたいと考えているので、いつでもお声がけいただきたい。
「熟議」に慣れたり、ファシリテーターのなり手が増えたりするよう、あきたスマートカレッジで講座も開講している。草の根的に広がっていけばいいと思っている。
→昨年度から、他県の生涯学習・社会教育担当職員が当センターの研修に参加するようになった。最初は1県だったが、その後2県、3県と拡大している。現在はオンライン会議システムもあるので、それらを使い他県の生涯学習・社会教育関係職員に対してアドバイスもしている。今後も他県か

らの参加が増えていくのではないかと考えている。

- ・副委員長：「今年度の取組」の説明の中で、アイスブレイクの1つとして「どちらのバウムクーヘンを選ぶか」という活動が紹介された。実際の「熟議」では、参加者に対して、どちらを選んだかだけでなく、なぜ選んだかも聞いたらどうか。選ぶ理由は人それぞれで、必ずしも自分のためだけでなく、他の人に分けてあげたいから大きい方を選ぶという人もいる。様々な価値判断も考慮に入れていただければと思う。
→今回は時間がなかったため丁寧に意見を拾うことができなかったが、通常の「熟議」では様々な意見を確認するようにしている。そういった意味も込めて、アイスブレイクでは、グループのメンバー同士が話し合い、互いの人となりを知ることが大事だと考えている。
- ・B委員：他県での取組や研修をとおして、また他県職員の方が本県の研修に参加した際の感想などから、センターとして得たものにはどんなものがあったか。また、他県での街歩きイベントの支援についての説明があった。その自治体は観光で有名だが、街歩きイベントを行ったことと観光は関わりがあったのか。
→その自治体は、パラリンピックの関係でバリアフリー等の取組を進める予定だったが、コロナ禍で事業が止まってしまったようだった。その後、どうやって取組を再開させていくかを考える中で、当センターに相談があった。自分とは違う立場の人の気持ちや多様な見方を感じてもらうため、街歩きイベントを提案し、実施に至った。当日イベントに参加した市長部局建設課の方は、「車椅子で街を歩いてみたら、不便な所がたくさんあった。規格どおりに歩道等を整備するだけではだめだということ強く感じ、職場の他の職員や次の世代に伝えていきたい。」と話していた。我々が目指しているところを理解してもらうことができたと感じている。
- ・C委員：生涯学習センターの取組を、これからも参考にしていきたい。また、「熟議」等については、アフターケアがあり、そこから次の取組につながっていくのが素晴らしい。計画の準備やチームワークの良さにあやかりたい。
- ・D委員：あきたスマートカレッジの説明の際、「地域課題・現代的課題へのフォーカスを進めた結果、参加者増加につながった」というのはすごい視点なのではないかと感じた。様々な方に学びを届けられるのがセンターの強みだと思う。
- ・A委員：自分は家庭教育支援指導者等研修に参加している。この研修では情報交換の時間が設けられていて、その時間に学んだことの確認や情報共有ができる。受け身の学習にならない工夫がされていて、ありがたい。
- ・B委員：私が所属している生涯学習団体の定例会は7月で150回目を迎える予定で、記念の講演会・演奏会を準備している。センターは現代的課題を意識しながら講座を企画しているとのことだが、防災に注目しているのはいいことだと思う。命に関わるものをどうやって楽しく講座に落とし込むかが大事だと思う。センターは参加者が楽しいと感じるものを考えてくれている。心の豊かさを求めるのが生涯学習だと思う。
- ・E委員：ハード面の老朽化の話があったが、高齢化が進む中で施設の集約化・縮小化

が進んでいる。生涯学習センターがその対象にならないことを願っている。ソフト面では、オーダーメイド型社会教育主事派遣事業のお陰で大変助かっている。「熟議」を進める中では、ファシリテーターの技術が大きな割合を占める。センターの職員は盛り上げ上手で行動力があり、いつも助けていただき、ありがたく思っている。障害者の生涯学習については、当自治体も取組を進めようと思っており、相談に乗ってもらっている。共生社会の実現に向けて進んでいきたいと思っている。

- ・副委員長：生涯学習課と生涯学習センターに大変お世話になっている。センターの取組を聞いて、「体験を伴う学習」が効果を上げているように思う。今後は、「動いた中で学ぶ」形の教育になっていくようにも感じており、「体験を伴う学習」がこれからの秋田県を創っていくのかと思う。生涯学習奨励員については、地域の中でどう情報を提供するかが大事だと考えているし、様々な情報を地域の中で活かしていくことも役割だと考えている。ポッチャについては、何年かすると皆慣れてくるかもしれないと思うので、新しいスポーツにも目を向け、情報提供をお願いしたい。防災・少子化は、国・県・地域の課題だと感じている。子どもたちを巻き込んで頑張っ取り組んでいきたい。
- ・委員長：センター職員の方々の生涯学習に関わる姿勢は素晴らしい。日々の仕事に個々の職員の生き様が表れているように思う。「熟議」も、ファシリテートに生き様が見えているからこそ、人を動かすのだと思う。次の世代にこの想いやエネルギーを伝えるようお願いしたい。防災については、水害等を「身近な危険」と感じている今の機会を捉えて、今後の研修に活かしてほしい。「自分事にする」ようにしてほしい。コミュニティ・スクールについては、学校づくりと地域づくりが一緒に進むべきだと思う。しかし形だけになっているところも少なくないのではないかと感じている。人が変わり地域が変わるといふ循環が必要だと感じる。

6 所長あいさつ

本日は様々な御意見をいただき、ありがとうございました。

委員の方から、「様々な人に学びを届けるのは魅力的」との言葉をいただいた。より一層多くの人に情報を伝える方法を考えていきたいと思っている。

防災について、「楽しく防災講座を受講したよね」という記憶は、実際に避難しなければならなくなった時に役立つのではないかと思う。

秋田県生涯学習センターは生涯学習の拠点として、今後も活動を続けていきたいと考えている。

7 閉会